

---

# おっさん企画 「モーホー銭湯」

カトラス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おっさん企画 「モーホー銭湯」

### 【Zコード】

Z9243E

### 【作者名】

カトーラス

### 【あらすじ】

部活の練習が終わつた後に銭湯に行く事になつた主人公達にある出来事が起ります。それは、とんでもおっさんとの出会い……おっさん企画解禁作品

長い夏休みも、まもなく終わりをむかえようとしていた八月下旬の夕暮れ時。

俺達、野球部員は太陽が西に沈みかけようとしている中、学校のグラウンドを走り続けていた。

野球部以外は誰も練習していないグランドからはスパイクか土を蹴る音だけが響いている。

「おい、お前らあ、声だしていけえ！」

メガホンを片手に野球部顧問の鬼監督がわめいている。

「ファイ、オウ」監督の声を擱いてギヤーランか仕方なしに号令をかけた

力ない声で、俺も続いた。

「オウ、オウ、オウ」

「お前らあ、氣合が入つてないぞ、あビグワシド三國追加だよ、監督が立ってる田の前を俺達はタテタテと通りすぎていぐ

隣で走ってる健一が息をあげながら監督に対する文句を言つてき

た。

「俺らが、この前の試合でぶざまな負け方したんで腹いせにやつて河合の奴、いちびつてむかつくわ。俺らが何したつていうねん」

「うだり」だのうる

俺も息をきらせながら健一に答えた。

この前の試合でのは、夏休みが始まる直前に行なわれた甲子園を目指して戦う地方大会のことなのだが、俺達はくじ運悪く、一回戦から優勝候補とあたってしまい、1-1対0という七回コールドゲームをくらっていた。負ける前までは、それなりにテンションの高かった俺達だったが、今では僥々散った夢のためにモチベーションは激しく低下していた。ただ一人の例外である、アホ監督を除いては

「ああ、カワイ子ちゃんとパコパコしてえ」

健一が突然、みんなに聞こえるように叫んだ。

疲れている部員達であつたがどつと笑いが起つた。

「SEXしてえ、ファイ、オウ」

キヤプテンも健一に釣られて素つ頗狂な声で号令をかけた。

みんなもキヤプテンに続いた。

「オウ、オウ、オ」

俺達、野球部は体力はあまりないが、精力だけは強いのだ。俺も含めて、丸い物があつたら、それは女の胸か尻にしか見えない連中である。

こんなんだから、ホールド負けをきっしてしまうのだと、みんな思つてゐるのだが、それはそれで楽しいものであった。

「お前らあ、何へラヘラ笑つてるんだ！」

アホ監督がまたわめいた。

それから、俺達がさらにつりにランニングを追加されたことは今までもない。

練習が終わつて部室で制服に着替えていると、健一が声をかけてきた。

「なあ、達也、今日宝来湯いかねえか？」

宝来湯つてのは近所にある銭湯である。時々、練習が終わると俺と健一は利用していた。

「今から行くのか？」

俺は疲れていたので、あまり乗り気のない声で言つた。

「おうよ、今から行くんだよ。サウナ入つて、水風呂浴びて、その後プラッシャー飲もうぜ！」

健一はどうしても銭湯に行きたいみたいで、田に浮かぶよつた事を言つて誘つてくる。

確かにプラッシャーは練習で喉がカラカラな俺には魅力的である。

「でもよ、宝来湯にガチャピンいるかも知れないから、なんか嫌な

んだよな

「ああ、ガチャピンかあ」

健一も俺からガチャピンという単語を聞いて少し顔がひきつった。俺達がガチャピンと呼んでいるのは、宝来湯に常駐していると思われるおっさんで、その筋の方と思われる御仁である。平たく言えば地元のヤクザなのだ。ガチャピンは元野球部だったらしく、俺達の野球部の名称の入った鞄を見てから話かけてくるようになり、一度つかまると長い野球談義が始まり非常にうざい存在なのだ。

しかも、話し方が命令口調で偉そうなので会いたくない奴であった。ガチャピンって言うあだ名は健一がつけたものだが、あだ名の由来はガチャピンの背中に彫つてある刺青からきている。ガチャピンの背中一面には日本昔話のオープニングに出てきそうな登り龍が彫つてあり、その龍にまたがるように人間もどきが乗っている。人間もどきと言つたのは、恐らく乗っているのは子供なのだろうが、刺青の配色が緑色をしていてとても人には見えない。しかも彫りしの腕が未熟なのか輪郭がぼけていて氣色の悪い生き物にしか見えないのだ。しいて例えるなら健一のつけたガチャピンにしか見えないものであった。

健一は少し考えていたが、すぐにいつものように屈託のない笑顔で言つた。

「達也、プラスシー飲みにいこうぜ！ ガチャピンがなんぼのもんじやい。それに、いつもあいつが銭湯にきてるとも限らないからな」

「そうだな、宝来湯行くとするか」

俺は健一の笑顔に釣られて自然と口から宝来湯に行くことを同意していた。

駐輪場に行つて、ママちやりに野球道具のつまつた鞄を前かごに押し込むと、他の部員達にバイバイと言つて俺と健一は宝来湯に向かつた。外はもうすっかり暗くなつていて、ペダルをこぐために点灯するライトが一つ外灯のない道路を照らしていた。健一はご機嫌

であつて、鼻歌まじりにペダルをこいでいる。学校から宝来湯までは十五分ぐらいかかるのだが、早く銭湯に入つてプラスシーを飲みたい気分が先行するので自然とペダルをこぐ足に力が入つた。まわり一面にたんぽが広がるあぜ道を走つていると、秋が近づいているのだろう、どこからともなくスズムシの合唱が聞こえてくる。自転車を走らせるたびに頬に当たる風も秋の気配を感じさせてくれるのであつて嫌な練習が終わつた高揚感も手伝つて実にすがすがしかつた。田んぼのあぜ道を抜けると住宅街に入り目指す宝来湯は目前だつた。ほどなくして宝来湯の煙突が住宅地の合間から俺達の眼前に見えた。

健一はさらにペダルをこぐ力を強めて自転車を走らせた。

趣のある木造創りの宝来湯の入り口の脇に自転車を止めると、俺達は湯と書かれたのれんをくぐつて脱衣所に入つた。番台から馴染みのおばちゃんが「いらっしゃい」と俺達の顔を見て言つた。番台に銭湯代の小銭を置くと竹を編んで作つてある籠に荷物を置いて汗ばんだシャツを脱いだ。

銭湯内は夕食時のためにどうか脱衣所にいる客は俺達だけでがらんとしている。

俺と健一はおばちゃんを気にすることなく、パンツを脱いでフルチンになると、申し訳程度に腰にタオルを巻くと引き戸を開けて浴室に入つた。中に入ると高く積み上げられたカラント桶を取る。

浴室には幸いにもガチャピンの姿は無く、おじいちゃんと、四十代くらいのおっさんのがいるだけだつた。  
「ガチャピンいなくてよかつたな。しかし今日は銭湯するでるな」  
健一はそう言って、かかり湯をするために中央にある一番大きな浴槽の前に立つた。

浴槽の外壁には銭湯にお決まりの富士山のペンキ絵が描かれていて、ちょうど絵の富士山の六合田あたりに湯気が立ち上つていて雲がかかつていて見えた。

「熱つちこ」

かかり湯をした健一が隣で叫んでいた。

先客で湯船に使つてゐるおっさんが健一の叫び声を聞いて笑つていた。

俺もカラソン桶に浴槽内のお湯を入れると健一みたいに叫び声を上げないよつこゆつくりとお湯を体にかけた。

お湯は健一が叫ぶのがわかるくらい高温だった。俺はお風呂は熱いぐらいが好きなのでちょうどいい湯加減だと思つた。お湯を一、三回、体にかけて湯の温度を体になじませると、俺達はゆつくりと湯船に浸かつた。

自宅の狭い浴槽と違つて、足を大の字に広げられるのは気持ちいいものだ。練習で疲れた体が癒される気がした。

「兄ちゃん達、いい体してるね！」

突然、先に湯船に使つていたおっさんが話しかけてきた。

「俺達、野球部なんですよ」

「健一がおっさんにそう言つた。」

「ほひ、兄ちゃん達、野球やつてるのか。通りで体格がいいわけだおっさんはフンフンと頷きながら、俺達の隣までにじり寄つてきた。

「兄ちゃん達、顔立ちもこいから女にモテるやひひ」

「そんなことないつすよ。ぜんぜんモテませんよ」

健一はおっさんに返答すると湯船から出て体を洗つたために立ち上がり立つた。

おっさんは、健一の立ちあがつた姿を見て「あそこも立派やないか！」と嬉しそうに言つた。

俺はおっさんが健一のあそこを舐めまわすような視線で注視しているので気色悪いなと思った。

おっさんも立ち上がると健一の後を追つよつて健一の座つてゐる隣に行つた。

俺は、体を洗う前にサウナに入りたかったので、健一に湯船から

一声かけてサウナに行つた。

サウナに入った俺だったが、なんだかわいそのおつさんと膣騷が  
を覚えておちつかなかつた。

だから、いつもより早めにサウナから出ると健一の方を見た。  
すると、健一とおつさんは、なんだか楽しそうに話をしているよ  
うであった。

俺は一人が何の話をしているのか気になつたので、健一の座つて  
る左横にプラスチックの椅子を置いた。

「そつかあ、健一君は童貞なんか？ それはもつたいないなあ」  
おつさんは、いつのまにか健一の名前を知つてゐる。

俺はタオルに石鹼をつけて泡ただせながら一人の会話を聞き耳を  
たてた。

「そつやあ、健一君。おつちゃんの知り合いの若い娘紹介してやろ  
うか！ 今、おつちゃんワケあつてその若い娘と一緒に住んでいる  
んや。その子、むちやくちやテクニシャンやでえ」

おつさんは健一の肩を触りながら座しげな話を切り出した。

だいたい、どんなワケあつておつさんと若い娘が一緒に暮らして  
んねんと俺はつっこみを入れたくなつてゐる。

「おつちゃん、その……テクニシャンつて……もしかして紹介して  
くれたらエな事できるの？」

健一は目を輝かせながらおつさんに聞いた。

「当たり前やんか、なんでもしてくれるでえ！」

「ほんまかあ、おつちゃん。そんなん聞いたら、俺たつてきたわあ  
」

健一は鼻の下と股間を膨らませていた。

「兄ちゃん、立つたらますます立派やなあ！」

おつ言つて、おつさんは、あらうことか健一の一物を軽くタッチ  
した。

健一はおつさんにて大事なところをタッチされて一瞬、からだが引  
きつたが文句も言わずにおつさんの話を聞いている。

「健一君、風呂から上がつたらおつちゃんの家に行こい。すぐに紹

介してあげるよ」

そう言つて、おっさんは再度、健一のあせりをペンペンとタッチした。

さすがに、今度は健一もムッとしたみたいでおっさん「おっちゃん、ちょ、なんで触んの」と言つた。

俺も流石にわざわざからのおっさんの怪しげ言動や態度を見て健一に言つた。

「健一、このおっさん怪しこど、家なんか行つたらあかん。何されるかわからへんわ」

俺の言葉を聞いてHロモード全開の健一もおっさんが怪しこと思つたらしく、おっさんに言つた。

「ほんまにおっちゃんの家行つたら、女の子紹介してくれてエなことやんのか?」

健一はおっさんに激しく詰め寄つた。

すると、おっさんはさきほどまでの猫なで声がいつぺんして急にドスの聞いた声を出した。

「兄ちゃん、おっちゃんが家に招待してやるつていつてるんだから黙つてついてきたらいいねん。それに、もし若い娘がいなかつても、代わりにおっちゃんが兄ちゃんのあれを つてやるやんけ、ええから黙つておっちゃんの言つこと聞いていたら間違いないねん」

ついに、ホモおっさんの正体が現れた瞬間のひと言だつた。

おっさんは、健一の手をひっぱつて脱衣所に連れてこいつにしていた。

その時である。

おっさんの頭にカラソ桶が激しくぶちつけられた。

「痛あ……」

おっさんはぶいに頭をカラソ桶でぶつかれたので変な声をあげた。

俺と健一はカラソでおっさんの頭を殴つた人物を見た。

そこにはガチャピンが仁王立ちしていた。

「ほりあ、おどれはまた、か弱き青少年をかどわかしておんのが」

ガチャピンは再度、おっさんを頭を力で殴った。

「旦那あ、堪忍してくださいよ。私はなんにもしてませんよ」

「そりなんか、お前ら」

ガチャピンは俺達に聞いてきた。

健一は首を振つて「おっさんに連れていかれそうになつた」とガチャピンに申告した。

「ほりあ、見てみい。今日はおじれのこと許せへんなあ、ええから、外いこい」

ガチャピンはおっさんの腕を掴むと、おっさんを脱衣所まで引つ張りだした。

ガチャピンの背中越しの刺青が光輝いているように見えた。

俺と健一も、すぐにガチャピンの後を追つた。

脱衣所内は修羅場と化していた。

おっさんは、ガチャピンに何度も殴られていて顔面が血だらけになつていて。

おっさんは、こままで殺されると思ったみたいで、隙を見て服も着ずに外の飛び出して逃げ出した。

俺と健一は事の顛末に驚きを隠せないでいた。

ガチャピンは俺達と目が合つと「お前ら、助かったやうう。俺様に感謝しろよ」と言つた。

「ありがとうございました」

俺達は同時に声を揃えてガチャピンにお礼を言つていた。

「礼はええから、お前らあ、俺が風呂から上がるまでここで待つておけよ。今日はお前に野球の何たるかをじっくり説明してやるからなー」

そう言つてガチャピンは浴室内に消えていった。

「どうするよ、健一」

「そんなもん、逃げるに決まつてんだから」

俺達は急いで着替えを済ませると番頭のおばちゃんにプラスチックを注文した。

おばちゃんは番頭の横にある冷蔵ケースから硝子瓶を取り出しつて

俺達に渡した。

プラッシーは得体の知れない色をしているが、そこがまたいの  
だ。

俺と健一はプラッシーを一気に飲み干した。

少しきつめの炭酸が乾いた喉を潤してくれる。

俺達は空瓶を番頭の上におくとおばちゃんに「また、くるわあ」と

と言つて、宝来湯をあとにした。

来た時と同じようにママやりの前かじに鞄を押し込むと、自転

車のペダルをこいで家路に向かった。

後ろめたさと夜風が心にしみた夏の終わりの出来事だった。

了。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9243e/>

---

おっさん企画 「モーホー銭湯」

2010年10月8日15時51分発行